

借字雜箋

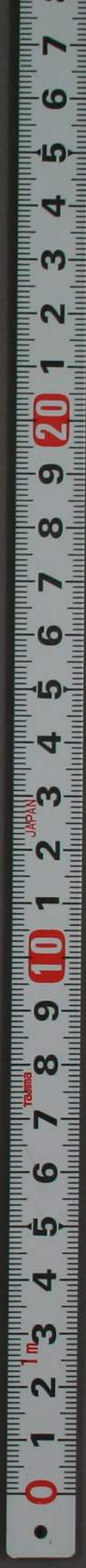
夏

取先八

名

驛
復

1曾
600
65



騶



鞭

完

門 曾 4
號 65
卷 65

これお師人の筆絶たることをぞある人
中作らるしその母を補ふ料子返ぬ二つあるね
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おきつたてりてりてりてりてりてりてり
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて

罪をなすをよき名にゆてりてりてりてり
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて
おしふちが申さかゝるゆえ二綴ありとて

守子

流轉數回古義物類卷之一

一若大藏十人斬

評曰流轉數回の四々なり書名子冠せしむつや
ころろのうらなれは漢の小説をよみしむるに
榮枯の矢生れ流轉のありきとて
又書名子冠せしむるに
書名をもつて記せしむるに
是と名つてはるの何れに
いふぞいふにねむるに
書も稀なるに
とらふて者なり
別
卷の二名は

又書名子冠せしむるに
書名をもつて記せしむるに
是と名つてはるの何れに
いふぞいふにねむるに
書も稀なるに
とらふて者なり
別
卷の二名は

我式亭先生在時運而著最部之裨史皆是翻々時世様

一無踏先輩之途轍者矣此卷篇名あり書鮮代時世様

評曰吾式亭先生在時運而著最部之裨史皆是翻々時世様
其述と求むるに
いふの運のよき
筆の申すに
類書に限り
又部のよき
唐山の書に部と唱ふ
又部の内あり
其の原若くは俗に
又部の時世様
助子のつらみ
の途轍と踏む
みる書表の篇
師とて

○仙者の注意

文小わ借天の雅俗を混し画子古今の交態と當る人々
小説の通例を以てしんも這程史ハ雅俗と混然を以て倍する
評曰一七之輩の途轍と指ぶるものもどくも此其地の
の通例を以てしんも

是余が一家の口調をもも句と傳ぶるものも得あり

一かゝるものもその文章宇宙を雷同一度世も規
範とある大家あるものも稱するものもあつて自誇り
つらものもあつてしんも標記して式三一家の交態の
文章をもそのものもあつて文とて一かゝるものも
句と傳ぶるものもあつてしんも人々やまきづくものも
卑下慢るものも傳差す人のものもあつて

且一頭流布の小説子言ハ首ハ繁英の如く朋ハ市月西山の如く
尾ハ八文舎本ハ各々一鳴声 驚きあふれも傀儡院本
の如く

この自らの卑下ありて他を及ぼすものもあつて
眼目ありて又本を終るものもあつてしんも
冊ののりもこれの如く又又傀儡院本とあつてしんも
あつてしんも傀儡院本とあつてしんも
この風情もあつてしんもあつてしんも
さうもあつてしんもあつてしんも

○地名考證

愛もが坐る大戸萬延を舞し小戸千盃を飲む 初背

萬延千盃の對りも物一流に數は千はるゝ あれた

ふれた万延とらそいさどいも及ばぬ 誕音鏡次と同じ

誕とよあもいさもも廢を廢り 良もも懐のさ

有り他者自教の教はあやとあり 具眼の人

愛もが飲るなるよとひ 十一面

不後とも使あ 十一面

中 古コロ

今 あれた

先 あれた

秀衡滅亡の天 十二面

秀衡ハ あれた

城 あれた

居 あれた

あ あれた

あ あれた

あ あれた

あ あれた

あ あれた

あ あれた

カミハハ弱の成りく俗にせんころころありてやその自異と
ありきるく男女自異をひらきあがりて求むる志をあらわ
すべく雅志のつひになうらうたるるあり

阿漕平太夫の然るく平太夫の背 白蛇の目るる
宝剣と護りて通ふるは

依るに然るが依るをくこそ依るるをなすこれ意に
揚るるを俗にまきくといふ理徳の目んとも漢文の

然るを振りて咬み天地と眼を穿りる配 阿漕平太夫を
うらうら 妙術をるは

此心甚くも天を叫び地を倒れ又より行ゆは天を倒る地を
喜ぶるをいふ小説の著るれは天地を眼を穿る異なるるを

天地黒白 天壤一青壤俗の重なり

天地を穿りて眼を穿る一竹のあり

天地を穿りて眼を穿る一竹のあり

不夜 割竹ひたさむらぬんが大鼓形も止む 九竹

平二子 尾腹をきりぬるるは 漸くは痛むられぬ 耐盗儀 頑八

● 丁卯の秋に下りてゆく 乙酉に 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
あれど 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
漸く 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
いふく 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
梅の 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
をさし 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
客よ 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる

室年 何事あるか 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
同く 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
あり 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
これ 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる

高が 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
山 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
乙酉 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
あり 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
西 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
山 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる

乙酉 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
乙酉 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
乙酉 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
乙酉 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
乙酉 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる
乙酉 乙酉の春に下りてゆく 乙酉の春に下りて来た方のめしむる

雲平のつらなる傍々たるるもの在下の不負魂りて克忍ひやう
 えと城まじりけい面カハハ強情カハハのれとさうさ偏よりりて在下
 中け魂るるがうさう強情カハハのれとさうさ偏よりりて在下
 肩に魂るるがうさう強情カハハのれとさうさ偏よりりて在下
 心そま日本魂カハハまけとさうさ偏よりりて在下
 おとんさうめつうさうおやあだん魂るるがうさう強情カハハ
 さうかあけりさう目もらさう魂るるがうさう強情カハハ
 邪魔カハハとさうめつうさうおやあだん魂るるがうさう強情カハハ
 まさたさうさう魂るるがうさう強情カハハ
 いさ卑下の稱謂カハハと某とさうかゆとさうさ偏よりりて在下
 雲平云云言カハハとさうさ偏よりりて在下
 文益あるとさうさ偏よりりて在下
 馬耳東瓜とさうさ偏よりりて在下

鶴林玉露ニ人生馬耳射東風柳色桃花却長
 久とさうこれと又李太白が詩もさうさ偏よりりて在下
 幸るまじり一文不通のるさうさ偏よりりて在下
 又牛子孫文とさうさ偏よりりて在下
 彈琴とさうさ偏よりりて在下
 物さう此白雲平とさうさ偏よりりて在下
 又さう馬耳とさうさ偏よりりて在下
 馬耳の東瓜を轉カハハて彈牛彈琴とさうさ偏よりりて在下
 三之卷總評
 橋の母床世のあ僕カハハの漕平二天子夫婦が長悼の思カハハ

標地くけの文言の婦やまの解易記をたのめるうち文辭は
かひも又人なれこれをめるとなりたれもこのかまき
雅文とよみあむむ人うまのさびをいふくは人の又新し
さうあせうあさるるまらるるこのあまのりてさしあや
ころるるるる又あるるる文辭のりるるるるるるるるるる
せどあさるとあるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
この文段はまじれささびひらるるるるるるるるるるるるる
亭一家変態の他文と又あるのひねとあるるるるるるるるる
備若に人るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
いさむもなるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
さねさあまのりるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
白雲平天城山をさるるるるるるるるるるるるるるるるるる

なるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
かくく邪魔が任あまのりるるるるるるるるるるるるるる
固敗れ城隙の人の所通るるるるるるるるるるるるるるる
さうあまのりるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
懸を又人なれこれをめるとなりたれもこのかまき
さうあせうあさるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
ころるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
せどあさるとあるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
この文段はまじれささびひらるるるるるるるるるるるるる
亭一家変態の他文と又あるのひねとあるるるるるるるるる
備若に人るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
いさむもなるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
さねさあまのりるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
白雲平天城山をさるるるるるるるるるるるるるるるるるる

落魄の魁音托トス
ん得達ニトヤ

とらむも又賢まはるが方よりくも造るるも一何と

夜視^{ヨモキ}しりしやあはるる^{シカネ}の尻よとありてありれ^{十七}背

賢まはる^{ヨモキ}の毒^{オホト}毒殺せんと計りし^{ハカ}賢まはる^{シカネ}宿所^{ヨモキ}よ方よりくも^{シカネ}狐^{シカネ}女^{シカネ}を^{シカネ}毒^{シカネ}ある^{シカネ}狐^{シカネ}の^{シカネ}腹^{シカネ}と^{シカネ}記^{シカネ}より^{シカネ}これ^{シカネ}を^{シカネ}竹^{シカネ}ひく^{シカネ}死^{シカネ}る^{シカネ}腹^{シカネ}こそ^{シカネ}總^{シカネ}評^{シカネ}多^{シカネ}し^{シカネ}也^{シカネ}

總評

小女^{シカネ}狐^{シカネ}の賢^{シカネ}まはる^{シカネ}子^{シカネ}若^{シカネ}が^{シカネ}さ^{シカネ}み^{シカネ}る^{シカネ}る^{シカネ}の^{シカネ}腹^{シカネ}と^{シカネ}人^{シカネ}の^{シカネ}親^{シカネ}の^{シカネ}仇^{シカネ}と^{シカネ}垣^{シカネ}根^{シカネ}草^{シカネ}の^{シカネ}土^{シカネ}を^{シカネ}あ^{シカネ}ま^{シカネ}竊^{シカネ}克^{シカネ}金^{シカネ}ま^{シカネ}の^{シカネ}狐^{シカネ}を^{シカネ}あ^{シカネ}白^{シカネ}は^{シカネ}雲^{シカネ}来^{シカネ}ま^{シカネ}珠^{シカネ}と^{シカネ}な^{シカネ}ま^{シカネ}ひ^{シカネ}も^{シカネ}行^{シカネ}母^{シカネ}の^{シカネ}人^{シカネ}の^{シカネ}あ^{シカネ}の^{シカネ}ま^{シカネ}ど^{シカネ}く^{シカネ}て^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}く^{シカネ}た^{シカネ}後^{シカネ}か^{シカネ}の^{シカネ}珠^{シカネ}と^{シカネ}乞^{シカネ}も^{シカネ}の^{シカネ}既^{シカネ}子^{シカネ}夫^{シカネ}狐^{シカネ}と^{シカネ}る^{シカネ}り^{シカネ}も^{シカネ}よ^{シカネ}く^{シカネ}人^{シカネ}語^{シカネ}と^{シカネ}る^{シカネ}ん^{シカネ}の^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}ど^{シカネ}く^{シカネ}て^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}く^{シカネ}た^{シカネ}後^{シカネ}か^{シカネ}の^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}ど^{シカネ}く^{シカネ}て^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}く^{シカネ}た^{シカネ}後^{シカネ}

△下
賢まはる^{シカネ}子^{シカネ}若^{シカネ}が^{シカネ}さ^{シカネ}み^{シカネ}る^{シカネ}る^{シカネ}の^{シカネ}腹^{シカネ}と^{シカネ}人^{シカネ}の^{シカネ}親^{シカネ}の^{シカネ}仇^{シカネ}と^{シカネ}垣^{シカネ}根^{シカネ}草^{シカネ}の^{シカネ}土^{シカネ}を^{シカネ}あ^{シカネ}ま^{シカネ}竊^{シカネ}克^{シカネ}金^{シカネ}ま^{シカネ}の^{シカネ}狐^{シカネ}を^{シカネ}あ^{シカネ}白^{シカネ}は^{シカネ}雲^{シカネ}来^{シカネ}ま^{シカネ}珠^{シカネ}と^{シカネ}な^{シカネ}ま^{シカネ}ひ^{シカネ}も^{シカネ}行^{シカネ}母^{シカネ}の^{シカネ}人^{シカネ}の^{シカネ}あ^{シカネ}の^{シカネ}ま^{シカネ}ど^{シカネ}く^{シカネ}て^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}く^{シカネ}た^{シカネ}後^{シカネ}か^{シカネ}の^{シカネ}珠^{シカネ}と^{シカネ}乞^{シカネ}も^{シカネ}の^{シカネ}既^{シカネ}子^{シカネ}夫^{シカネ}狐^{シカネ}と^{シカネ}る^{シカネ}り^{シカネ}も^{シカネ}よ^{シカネ}く^{シカネ}人^{シカネ}語^{シカネ}と^{シカネ}る^{シカネ}ん^{シカネ}の^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}ど^{シカネ}く^{シカネ}て^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}く^{シカネ}た^{シカネ}後^{シカネ}

越^{シカネ}と^{シカネ}賢^{シカネ}ま^{シカネ}は^{シカネ}る^{シカネ}が^{シカネ}子^{シカネ}若^{シカネ}が^{シカネ}さ^{シカネ}み^{シカネ}る^{シカネ}る^{シカネ}の^{シカネ}腹^{シカネ}と^{シカネ}人^{シカネ}の^{シカネ}親^{シカネ}の^{シカネ}仇^{シカネ}と^{シカネ}垣^{シカネ}根^{シカネ}草^{シカネ}の^{シカネ}土^{シカネ}を^{シカネ}あ^{シカネ}ま^{シカネ}竊^{シカネ}克^{シカネ}金^{シカネ}ま^{シカネ}の^{シカネ}狐^{シカネ}を^{シカネ}あ^{シカネ}白^{シカネ}は^{シカネ}雲^{シカネ}来^{シカネ}ま^{シカネ}珠^{シカネ}と^{シカネ}な^{シカネ}ま^{シカネ}ひ^{シカネ}も^{シカネ}行^{シカネ}母^{シカネ}の^{シカネ}人^{シカネ}の^{シカネ}あ^{シカネ}の^{シカネ}ま^{シカネ}ど^{シカネ}く^{シカネ}て^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}く^{シカネ}た^{シカネ}後^{シカネ}か^{シカネ}の^{シカネ}珠^{シカネ}と^{シカネ}乞^{シカネ}も^{シカネ}の^{シカネ}既^{シカネ}子^{シカネ}夫^{シカネ}狐^{シカネ}と^{シカネ}る^{シカネ}り^{シカネ}も^{シカネ}よ^{シカネ}く^{シカネ}人^{シカネ}語^{シカネ}と^{シカネ}る^{シカネ}ん^{シカネ}の^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}ど^{シカネ}く^{シカネ}て^{シカネ}あ^{シカネ}る^{シカネ}ま^{シカネ}く^{シカネ}た^{シカネ}後^{シカネ}

賢多しはまの多る子かゆくれどさりし日より鄰家の人質
リンカ ヒトツキヒト
 思六中より毒意ヨモキ見か日未怪貪コシカシるを是彼と云ひある
 したん其彼者を疑ウタガハシふにるる多るたるに其賢多し
 とるのちるに白物シラモノこれならん此方のん素のりくこも
石の操
 らが彼カのちかえりるる思オモカる。性情セイセイ不定の人其
 いそまぬゆれそられば用心ココロヲこを疎スこ

四之巻ノ下

新撰字鏡
 餽寄食也
 能比波年

吉香 餽と口は糊コ正る業もなるにハセ
 糊コ餽コの餽コの餽コの餽コの餽コ
 糊コ結メのコのコのコのコのコ
 粥カ也正義日説文以此傳コノコトヲ四ヨ方ハ故ユ以チ寄シ食ス
 言コト之コト宜ヨク照ス正ス字ニ通ス餽コト字下のコトとモしムにシてハ傷ム

頑コハ子シのシのシのシのシのシ
 有ア厚クゆフとト十ニ餘ヲ町ニ一ニ餅ト山ノ賊ト頑ハがル鹿ノ山ノ土ノ音ノとス
 寮ニ仲ニたシるコト

サキ 頑コハハのノ曇ルはハ平ニはハ腕ヲとスるコトをシるコトをシるコト
サキ 異ニをシとスるコトをシるコトをシるコト
 腰ヲ燧トをシるコトをシるコトをシるコト
 いもあまりの何トもシるコトをシるコトをシるコト

頑コハ云フたシるコトをシるコトをシるコト
 氣ノ董ノのノ小ノ氣ノもシるコトをシるコトをシるコト
 他ニよりシるコトをシるコトをシるコト

辟言の牧野のありは對して七八といふが如しかれが頭
ハレ此の言をいひたるは似たりやその非を去る
ありしめ人の口づられを氣に比するにあんやこれ
はんごの情をいひたるはし又あり氣華の小氣とある
動句のいひたるは

寔の隠形氣頭八とを屬トいふるは小城一面
二又吉智が山寨へ到るといふは二十人ぞうのわが
いひたるはとあり屬といふるは小城といふるの
まをいふていれ既よ山寨と構堂と集まる
りの中よの頭ハカいらはとあるはと尺ゆれにかつら
あはれたるは
強は固辞の彼的の携る所の長平刀をいひつるは立地をいひ
て

各いふと顧れの面 二これに頭ハあまひる吉香と山寨の
箒首をせんといふは

一人の小箒猿のつらふとていふは
寔は子ありちふありとありあんといふは庭火を十二と
返はめつらふはの云吉香これとていふは
の脚の夜の職の
つらふれとありはの
めづりしる

吉香が件の故を去るは
の辭ありとこれのいふは
ぬとくありは
のいふは

ニシテ自ラ大方ノ味ヲ合キルニ似タリ 省官察示知ノ戲
 作者心素ヨリ吾書堂ノ賜ヲ辟言ハ錦高表ニ尾石ヲ
 包ムルニ有リ不字ヲ益フ博物ノ招牌ヲ打サレハ發
 客忽チ拙文ト四言リ一年ノ米 擅自ラ空乏ス
 仍枝引ノ書道詭詭モ出シテ 新藤氏ヲ留ス

一トハナリ又名ヲ賣ル作者利ヲ射ル書日録
 呼招牌ニ虚誰ナル哉 自誇心とこれとあり
 これのがたぬ卑卑と仰る自誇心とこれとあり
 かんぞとく又えれども他の他人の枝引のおやう
 もどくくりか目録へあそこのめんと世をまはす
 ありさうのこれとこれの言ひ強いのかと教うめ

此れをかくさぬ極力他の書と異なり一年の米徳
 知念よとつとあし相語を又吾書堂の賜ととつと
 云云と子書堂をたのむ人といふと一いふは人の
 りもたあそびを合せるるあまうさうさうの此れと
 かさるの事物法と書いさるめとさうさうの書と
 卑劣な事と書いさるめとさうさうの書と
 名の書と書いさるめとさうさうの書と
 のし一書の開巻の文人と書いさるめとさうさうの書と
 魂の人何んかあつたひの事と書いさるめとさうさうの書と
 るかかたれんかあつたひの事と書いさるめとさうさうの書と
 又一年の米 擅自ラ空乏ス 野鄙心

これより
比喩の
雲の
あり

武蔵のつるまてむ 微力の吉音と推く 貝のしとる
何のありありや 又吉音の 鑄るる 尾尾 尾尾
ひらきつららえんとて底 せしるん吉音おれんん
かくを ^{カク} 知りし ^チ 事 ^{コト} なるん ^{ナラ} 顔 ^{オモ} 八 ^ヤ ち ^チ ろ ^ロ 心 ^{シン} 子 ^シ
只 ^{ヒト} 信 ^ノ 疑 ^ウ の ^ノ ち ^チ と ^ト 匹 ^ヒ つ ^ツ ば ^バ ら ^ラ ぬ ^ヌ の ^ノ こ ^コ と ^ト 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
と 櫻 ^{オウ} ざ ^ザ け ^ケ につ ^ツ ち ^チ ころ ^{コロ} ぬ ^ヌ る ^ル 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
京 ^{キョウ} あり ^{アリ} ころ ^{コロ} なる ^{ナラ} 狂 ^{キヤウ} 言 ^{ゴン} の ^ノ こ ^コ と ^ト 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ

山打有、まさゆわの小海子 中山よりなるもあつ
このやふくおも文七とあふ
このよかよりなるもあつ
しんく ^シ 志 ^シ 名 ^ナ を ^ヲ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
かく ^{カク} 物 ^{モノ} 治 ^チ が ^ガ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
巻 ^{マク} 名 ^ナ を ^ヲ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
る ^ル 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
後 ^{ノチ} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
後 ^{ノチ} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ

子かひん 記 ^キ 行 ^{コウ} 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
山打有、まさゆわの小海子 中山よりなるもあつ
このやふくおも文七とあふ
このよかよりなるもあつ
しんく ^シ 志 ^シ 名 ^ナ を ^ヲ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
かく ^{カク} 物 ^{モノ} 治 ^チ が ^ガ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
巻 ^{マク} 名 ^ナ を ^ヲ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
る ^ル 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
後 ^{ノチ} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
後 ^{ノチ} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ

徳巻批評

つる ^{ツル} 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
しんく ^シ 志 ^シ 名 ^ナ を ^ヲ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
かく ^{カク} 物 ^{モノ} 治 ^チ が ^ガ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
巻 ^{マク} 名 ^ナ を ^ヲ 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
る ^ル 事 ^{コト} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
後 ^{ノチ} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ
後 ^{ノチ} なる ^{ナラ} 乃 ^ノ の ^ノ 思 ^シ 名 ^ナ

正作より
比喩に
雲の塊
のまの
あり

武蔵ののれまふも微ヒリキかめ吉香と推ヒキる旨イハれとあるも
 何ナニのありやヤそらふシし又吉香の辞ハナハと記タシし年トシ
 のノまマりリとト感カせセしシん吉香おんニりリみミのノ清ス
 かりカるル智チりリるルんン窮キウむムるルるルんン年トシ頑ワンハハのノ心ココロ
ヒタスラ只ヒト管ケツにニ風カゼのノうウらラとト画エにニつツねネるルもモのノこコとトくクみミのノ旨イハれレ
 と推ヒキぶブのノつツやヤくクそソらラふフとトこコのノ秋アキ向ムカひヒのノ年トシ
 京キョウちチとトさサるル狂言キヤウゴンのノ正テイ本ホンよりヨリ出デるルとトあアはハるルもモあアらラふフ
 下シモのノめメとトありアリ極キョクいイのノありアリとト大ダイ切キのノ草クサ布フもモあアらラふフ
 とトあアらラふフ極キョクいイのノありアリとト大ダイ切キのノ草クサ布フもモあアらラふフ
 とトあアらラふフ極キョクいイのノありアリとト大ダイ切キのノ草クサ布フもモあアらラふフ
 とトあアらラふフ極キョクいイのノありアリとト大ダイ切キのノ草クサ布フもモあアらラふフ
 とトあアらラふフ極キョクいイのノありアリとト大ダイ切キのノ草クサ布フもモあアらラふフ

今首ニセリタルキアリキ
今ハ其書ニ生ラリ

徳巻批評

山村ありまキさサのノのノ小コ舞マユ中ナカ山ヤマ又マタ中ナカのノありアリ
 かのカノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフ吉ヨシ香カがガ舞マユもモあアらラふフ
 つツくクのノあアらラふフ才サイ藝ゲイをヲあアらラふフあアらラふフあアらラふフ
 しシのノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフあアらラふフ
 しシのノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフあアらラふフ
 しシのノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフあアらラふフ
 しシのノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフあアらラふフ
 しシのノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフあアらラふフ
 しシのノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフあアらラふフ
 しシのノあアらラふフおオのノ文フミ七ナナとトあアらラふフあアらラふフ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is densely packed and covers most of the page.

徳意世世評

あまの
あまの
あまの
あまの

Handwritten text on a vertical strip of paper, possibly a label or a note, written in a cursive script. The text is oriented vertically and appears to be a continuation or a separate entry related to the main document.

江戸のよき小説の執向は、
巧物にやられたり、
大それた同好の、
正しきもの、
皆これに、
才の乏れ、
小説の、
越え、
彼は、

をらふ

完

らふもやうらなぬのあはれおとせんとて
あふくはまらう

○ ねよかのあはれ 土佐 世統 おとせんとて
あはれ おとせんとて

○ 其方 おとせんとて 一 土佐 同

うらなぬのあはれ おとせんとて
わが おとせんとて

○ ねよ おとせんとて 土佐
うらなぬのあはれ おとせんとて
唱 おとせんとて

○ 毒 おとせんとて 土佐
うらなぬのあはれ おとせんとて

あはれ おとせんとて

○ 悲 おとせんとて 土佐
あはれ おとせんとて

あはれ おとせんとて

~~あはれ~~

○ 月 おとせんとて 土佐
あはれ おとせんとて

あはれ おとせんとて 土佐

いづかへは他向するはこきりせんよれとらんね
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田

○原形を云ふのまゝに撰をあげたり云々大念
たふあつてつらつらみよみ 十九卷の撰はらぬ
つらつらみよみ 一白りぬるうさし げんくま堅田
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田

○昔の物語とて 翻しつて ちん面 ことか
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田

○見ら役のころとて ちん面 ことか
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田

○たふあつてつらつらみよみ 十九卷の撰はらぬ
つらつらみよみ 一白りぬるうさし げんくま堅田
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田

○総評 熟手あつて 勇力あつて せんじ
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田
あつてはむむ 一白りぬるうさし げんくま堅田

この世の世を此の世の世と云ふは、
ちうくふらふらに、
思ひも一ちうくふらふらに、
あゝと云ふも、
おゝと云ふも、

卷之二

あゝと云ふは、
おゝと云ふは、

あゝと云ふは、
おゝと云ふは、

福ハ草子履はよくぞあり
あゝと云ふは、
おゝと云ふは、

あゝと云ふは、
おゝと云ふは、

あゝと云ふは、
おゝと云ふは、

あゝと云ふは、
おゝと云ふは、

○ 奸曲邪智の愚者ありき 九脊田子松よりあやめ

○ 邪曲邪智なる人 任人し愚者ありあやめ

○ ちよ強みらあやめのも 愚者ありあやめしやん

○ 田子松があやめあやめあやめ 十哲あり

○ 水性の昔之子かかん 田子松

○ 水性の昔之子かかん 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ ちよちあやめあやめあやめ 田子松

○ 信太のゆまう候の面三つ株
とらふに候

○ 信太のゆまう候の面三つ株
十二ヶ月信太

○ 信太のゆまう候の面三つ株
十五ヶ月

○ 信太のゆまう候の面三つ株
十六ヶ月

○ 信太のゆまう候の面三つ株
十七ヶ月

○ 信太のゆまう候の面三つ株
十八ヶ月

○ 信太のゆまう候の面三つ株
十九ヶ月

正しめあつてのきつたおとすあつてみせん

其のまゝの塔のほつてくわる大面

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

總評

正しめあつてのきつたおとすあつてみせん

其のまゝの塔のほつてくわる大面

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

おとすおとすおとすおとす

之何れに依りてあやめよあれたるを肩こゝれと
 過りしはさしやとありあつらんこゝれを
 むりともせしむ

卷之三

離枝 三十四番

離枝 廿七行

音訓 とうとうあせ
 けりしりぞくもよきぬんがわ
 けりしりぞくもよきぬんがわ

〇 姓名 水地 信太の由あり 背 ちりしりぞくもよきぬんがわ
 りぞくもよきぬんがわ

〇 哉 ちりしが 洗物 忽地 落らる 隨音 ぞと
 ちりしりぞくもよきぬんがわ
 ちりしりぞくもよきぬんがわ

〇 昔より地獄の世をひしとてひしりや 葉をながし
 ちりしりぞくもよきぬんがわ
 ちりしりぞくもよきぬんがわ

江口の駿々をどりしれあはぬ枝中の長めあはぬ第の
 ねらふまはし 後をゆきぬの義をなと長しあはぬ
 ちかしくあはれぬ君がてゝあはれぬしきと
 夢をながしとてしにさるあはれぬあはれぬ
 りの長きとてあはれぬあはれぬ— 〇いえあはれぬ
 ららるる 康が上書きの以圖るあはれぬ
 言上あはれぬ— 〇いえあはれぬあはれぬ
 まなつて又人つてあはれぬ又あはれぬ
 甲よあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ
 げえあはれぬ— 〇あはれぬあはれぬあはれぬ
 あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

〇 ねれあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

〇 あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

〇 あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

あはれぬあはれぬあはれぬあはれぬあはれぬ

○ 宮殿をくまぬしつらきやうなまはるの老のなまひの詩

まことまふ 日下 ちかぢの 日下 けいふの 老のなまひ
のしりききとらひん ちかぢのなまひ 柳花の人のなまひ

○ 満の國の習俗 十六日 満の國のやうな日

の習俗 習俗の人の心は世の中よりよくなると
はなれあつたをいふるも 己を懐く 一人と服の

○ ちかぢと又人の心は世の中よりよくなると
はなれあつたをいふるも 己を懐く 一人と服の

ちかぢと又人の心は世の中よりよくなると
はなれあつたをいふるも 己を懐く 一人と服の

○ 男の心とまはるも 活けられた 佳まはるし 面世をさうが

るわい別はまはるも 己を懐く 一人と服の

○ ちかぢの曲は世の中よりよくなると
はなれあつたをいふるも 己を懐く 一人と服の

樂曲うらやまの曲は世の中よりよくなると
はなれあつたをいふるも 己を懐く 一人と服の

○ ちかぢの心とまはるも 活けられた 佳まはるし 面世をさうが

○ 柳鐵自心をもつて 徳あるもの 山林塚廟のあり

ちかぢの心とまはるも 活けられた 佳まはるし 面世をさうが

能 山林家畜 作らぬ 餓鬼の 餓鬼の
 鬼ハ 飢と 通ス 餓鬼 庭の 廟堂に
 廟堂と 餓鬼 塚と 廟堂 大、異なり
 ○ 異色の 枕の 塚と 廟堂 大、異なり
 言と 子の 異なり 大なり 言と 子の 異なり
 病を 承く

○ 昔之且る 中も いたれ 醜
 昔 日 且 の 事
 如 評

世を 承く 信の 夫の みの あり あり あり
 此の 世を 承く 信の 夫の みの あり あり あり
 可也 昔 承く 信の 夫の みの あり あり あり
 可也 昔 承く 信の 夫の みの あり あり あり

吉が何者七位十柳はあまのよんこまぶら
 むゆとてうらひしうやみぬいの叫れりし河犯
 こもしあひあはせど後子ゆふとゆくとてま
 云きりくつしうやみあまのこをながぞお
 つかんあひのうらひあはれつとてまきうらると
 じまふよかふらふとてえん

巻之四

○抱帯のしるはう 腰のあはまのけつる 袴下抱帯と袴
~~抱帯のしるはう~~ 抱帯のしるはう 抱帯のしるはう
 めのりうの細帯はうとていふのたてはつ
 したまのあはれとていふたてのりふり又
 走者とりけりゆりゆりお供がももあはれり

○田子ねちる日ま血脈あり我と疎ト吉このこは
 のいり姑お久つと面るくそくくあゆつて
 我放たゆらわらして言後とてりるのま(二月
 二れがまぶらとていふるくすまあまの
 〇 江戸の吉をとりて 吉とて袖と股
 ままわら田子松の放せりくゆりるがと黒暗
 女と追放めと吉とが袴と引柄と九面
 袴をのち子るぞいなる代々の人へばえり
 んやうせりる心持もたけの腹はあはれり
 へりりるくすまのあはれりるはあはれりる

十いぬあはれり又ちれりるくすまのあはれりる

〇 夫彼と比するを似たり一窮鬼といれぬや
 夫彼令眼注弟と遂云云八なり 彼此と熟
 せど夫彼とばさるわぬても令明とほくと
 〇 夫彼と比するを似たり一窮鬼といれぬや
 〇 夫彼と比するを似たり一窮鬼といれぬや

〇 夫彼と比するを似たり一窮鬼といれぬや
 〇 夫彼と比するを似たり一窮鬼といれぬや
 〇 夫彼と比するを似たり一窮鬼といれぬや

〇 下巻の海客と云々 〇 下巻の海客と云々

〇 下巻の海客と云々 〇 下巻の海客と云々

〇 下巻の海客と云々 〇 下巻の海客と云々

〇 下巻の海客と云々 〇 下巻の海客と云々

〇 下巻の海客と云々 〇 下巻の海客と云々

〇 下巻の海客と云々 〇 下巻の海客と云々

○ 昔つゝ云々其様更をさうく世に ねすのそえん

○ 法の本子あつたし だに 重なるのやまねなき

○ つづねにしとくよ 十のころ 重なるのやまね

○ 相とつて 妻子とまらあつ 法行をわん 夜をる

○ 面 あり 今 法行をわん 列まよる 一いん

○ 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

○ 昔つゝ云々 昔つゝ云々 昔つゝ云々

のよからんぞ

卷之五

○ ちげのまぢうまゝあり 五百 るんて 500 ぶちやん
りりゆくの解ん

○ 素いこと道なる人の ^{つかまもり} 徳年さうらうんこ ち面

ちねの赤 ^{あか} ちねの赤 ^{あか} ちねの赤 ^{あか} ちねの赤 ^{あか} ちねの赤 ^{あか}

○ 今たれといふ ^七 七 ^七 七 ^七 七 ^七 七 ^七

○ 徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん}

徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん} 徳君 ^{いん}

○ 改 ^あ 改 ^あ 改 ^あ 改 ^あ 改 ^あ

改 ^あ 改 ^あ 改 ^あ 改 ^あ 改 ^あ

○ 計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい}

計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい}

計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい} 計校 ^{けい}

○ 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また}

又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また}

又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また}

○ 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また}

又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また} 又 ^{また}

の在るべきを至しとて教定なるが

物

物七上馬をとりて在別人の如く
あやふくも吾も通ども也官家の家よ
又馬多を閑中を後夜が家録を
坂門部破門一盛と別人の
島はも男の心保と先ひのこま
此物修んそ悪邪正勇敵強弱
物以成とらざるやも他は
破門と字もあつても他は
春の物もひらきたるもの

若くは内田の如きあつてさあや
あつてさあやあつてさあや

物

物の中身の例にさあやあつて

物

この如き物に接するやさあやあつて

あつてさあやあつてさあや

あつてさあやあつてさあや

あつてさあやあつてさあや

あつてさあやあつてさあや

あつてさあやあつてさあや

のちとあるは、
かたは、
ふたは、
名は、
評つ、
櫻、
こゝろ、
公論、

あ
の
め
八
月
全

二のち何人の言を聞かば又いふ事ありて
るあるもあはれぬ人の水そま
ぬし人ぬみそを思ひおぼえたる
てんあたるもまねてあはれをあらわ
あはれよしとてあはれいほめたりえを
あはれなるもあはれとあられぬ
衆のいふべんうもあはれなりとて
よもいふやあはれとていふは
いふべんうもあはれとていふは
いふべんうもあはれとていふは

雙帳記巻一

鳥有氏評

作者自序

貸本屋様にお媒人なり云云而を貸本屋様方へ
山崎のあはれ云云

評曰人を教ふるは命をさすなり弄生は似たり
狂文といひゆるくこれなり物なりあやま
らん言ふはなれしやあはれとてかたつり
敬ふ心なるをいふ人なりとてあはれ
のこゝろあはれとていふはあはれなり
常言の事言ふはあはれなりとていふは
いふべんうもあはれとていふは

地名年月日時人の姓名のふひぬくをてあつてあるが
評曰るより所をさるるをていへばまことなるをいへば
の禪史にまは様のものがたつていへばつらねの侯介
よりお徳源の侯介をいへば時代年月を禪史に
人の姓名も未生の姓名をいへばこれの侯介の侯介
をいへばこれの侯介をいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば

ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば

者と評をさるるをいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば
ありまじいより侯介をいへばこれの侯介をいへば
まことなるをいへばこれの侯介をいへば

所記 隆平盛衰記卷ノ十ノ尺之ニ燈

燭臺鬼云云

隆平盛衰記卷ノ十ノ尺之ニ燈

其鬼の文をりてある

評曰燈臺鬼のりてあるをよれ盛衰記ニ出たり
るよりハ格別ニてく本文を何げテ燈臺ニ行ハ
りありや輕の大臣云々のりてある所の十尺ノ
之をよれ輕の大臣と他ノ役ノりてある
これ所謂空をよれと云ふ事也
燈臺ノ鬼云々

以上序文所記并ニ燈臺の証あり

大佛九郎貞直

評曰ついでと云ふ事ありて之をよれ大平記ニ
と云ふ大仏氏のお事也と云ふ事ありて大平記ニ
所記あり大仏の訓ありと云ふ事あり

大仏九郎貞直

雜記ニ命ノ陣をよれと云ふ事ありて大平記ニ
與ハぬと云ふ事ありて水と云ふ事ありて與ハぬと云ふ事あり

陣のりて陳ニ
修る傳わぬ
と云ふ事あり
ぬと云ふ事あり

評曰古人の文は孫子の國のありさるるを以て燕巢千幕
を以て了燕人述を以て之は堂を以て之は決し
第とていふのいひのまのまの人のまのまのまを
れめし軍を以て之のの孫國を以て人をもたす
焚うるられし四壁のうりしは軍を以て之のまを
の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを
や燕の果れしを以て之の軍を以て之のまを以て之のまを

鍾太が農史を以て之を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを
劍太云云の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを
まのまを以て之の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを



評曰入道とて之の相授入道一人を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを
人の思として之の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを
まのまを以て之の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを
入道一人の思として之の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを

○巻二

柳村が海なるやを以て之の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを
七人をもて之の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを
史の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを以て之のまを
燕の軍を以て之の軍を以て之のまを以て之のまを以て之のまを以て之のまを

評曰乃の意はさるるなり角の角人家の辨はさる
蒸るをさるるなり角の角人家の辨はさる
と云ふの世に蛇なり角の角人家の辨はさる
さるるなり

小蛇の角と云ふはさるるなり角の角人家の辨はさる
後を角と云ふはさるるなり角の角人家の辨はさる
評曰乃の意はさるるなり角の角人家の辨はさる
いふのこゝろはさるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる

摩訶の五輪の塔を毒子よ復さし之の五輪の塔を
新中の因陀開山よりその事なりと云ふは
さるるなり角の角人家の辨はさる
評曰乃の意はさるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる
さるるなり角の角人家の辨はさる

吾妻がゐる子堂花鳥よ奈葉去られ紅中才難をよ何能
吾妻の船中よりちやうと後居する夕立のふり蓮の花を
なまの木の枝の尻子玉の枝をわたりてを懸けのうら
評曰玉の枝の珊瑚をわたりて木をよしの枝よれ
ゆりよあふむ

あふむは
盧胡 あふむは
四玉の巻をみよ出さる
十五

胡愈と書くものいふとよしと書くもの
といふあふむといふもの
盧胡のそとそとる

吾妻が郷ら行くや中よりをえられをよれあふむのそ
もろあふむをよれあふむのそとそとる

覆面以中唐袖の衣服を甲服に
白装束 三十三

評曰このびのれや中よ白装束せしむハ
勿れをよれれをよれは先好あわをよれは他
この曲のよきよ竹をよれは唐袖の服をよれは
よりよれをよれはのれは打拵みよせよるの装
束のよれをよれはそれハ我事あるんぞ
あふむよれをよれはそれハ我事あるんぞ
あふむよれをよれはそれハ我事あるんぞ

○巻ノ四

山咲 昨五郎が吾妻を妻にけり口は信はる股子斬金
堂は其の彼南方すうまき島が如きや一朝鳥の力と
常小人の心 價は人金十兩とて是の人金もくらの代は吾
妻と離別しこまはあふよそりしは

評曰この腹りこたふ多き役の物とあはれくあは
しと多し執向あふりよあはれめけが人情
こくぬえん 執とのがれさあがはそは後
るんこくぬえんさうりの才もさうれもいさ
くく物信を信じてさうり流りよあはれくまや
公竹 竹屋の主人の
山咲 鎌倉
鎌倉 鎌倉の屋敷にありしは

者が竹屋よりちりける小藪の刀子とをさうりしは
尺々この刀子より先 鎌倉 所おせよめくれば
あの軍用金と千とあとのまことりしはのこが先 鎌倉
んとらひし

評曰これ のこが先と千とあとのまことりし 鎌倉
めが執向なるべしはの鎌倉とて人の時はおあ
つとて 鎌倉とて人の時はおあつとて 鎌倉
あつとて 鎌倉とて人の時はおあつとて 鎌倉
年月とて人の時はおあつとて 鎌倉
又とて人の時はおあつとて 鎌倉

いひつるをいし狩方ならぬの...
これを見を証信し年々のまづあまは...
あつてはあつた...
お国を去る...
さういふ...
さういふ...
さういふ...
さういふ...

○巻ノ五

さういふ...
さういふ...

○巻ノ六

越中国立山の月...
の傍の辰

草のうさぎ...
あれ...
祭祀のつげ...
陣の陳...
あやま...

